

令和 2 年 5 月 22 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13667

研究課題名（和文）麻薬紛争下の集合行為：現代メキシコにおける自警団運動の比較分析

研究課題名（英文）Self-Defense Forces of the Mexican Drug War: A Comparative Analysis

研究代表者

馬場 香織 (Baba, Kaori)

北海道大学・公共政策学連携研究部・准教授

研究者番号：10725477

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではメキシコの麻薬紛争に着目し、暴力が人々の日々の生活を脅かすなかで、非常にハイリスクな集合行為である自警団運動が発生、拡大する条件についての分析を進めた。麻薬紛争の下、とりわけ貧困状況の厳しい辺境地域において、市民に対する暴力被害が急激に高まり、腐敗した地方当局に代わって市民の保護を担う公的機関も存在しないなかで、自警団運動が市民にとって現実的な選択肢となっていた過程を論じた。とくにミチョアカン州で勃興した自警団運動に着目し、強固な組織構造の存在や地元コミュニティの連帯、高い戦闘能力、そしてフレーミングの効果が、大規模な運動への発展に寄与したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

麻薬紛争下の自警団運動は、参加者自身やその家族までを危険に晒す非常にハイリスクな運動である。それにもかかわらず、なぜ人々は自警団を組織したり、戦闘に参加したりするのだろうか。ミチョアカン自警団に着目した本研究の成果は、研究がまだ十分になされていないメキシコの自警団運動の生成メカニズムについてだけでなく、広く紛争研究における暴力的集合行為の発生条件に関する研究にも示唆をもつ。社会的意義としては、麻薬紛争によってもっとも影響を受ける一般の人々に焦点を絞ることによって、フォーマルな政治だけでは捉えきれない実態をみる視角を提示した点をあげることができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explain why and how self-defense forces emerged in different parts of Mexico in the midst of harsh drug war violence. From a theoretical standpoint, participation of people is puzzling, if we consider the high-risk nature of its activities. This study points out conditions, such as the ineffectiveness and corruption of local authorities and the marginal economic development, under which participation would be practically the only option that people could choose. The case study of Michoacan's self-defense forces further describes how structural conditions, resource and flaming effects contributed to the expansion of the movement.

研究分野：比較政治

キーワード：麻薬紛争 自警団 メキシコ 比較政治

## 1. 研究開始当初の背景

メキシコの麻薬紛争というと、一般に麻薬犯罪組織(カルテル)によるセンセーショナルな暴力のイメージが先行しがちであるが、貧困や格差、地方政治の腐敗、政軍関係など、さまざまな問題と密接にかかわる、きわめて複雑な事象である。北に世界有数の麻薬消費国であるアメリカ合衆国と国境を接するメキシコでは、1990年頃から麻薬売買の縄張りをめぐるカルテル間の抗争が激化し、さらに「国家対カルテル」の構図も加えた内戦ならぬ「犯罪戦争」(Lessing 2015)が展開する。NAFTA 以後の米国からの安い農産物の流入による農村の窮状は、若者たちが犯罪組織にリクルートされる素地を形成し、麻薬をめぐる暴力の激化や地方政府の腐敗は、民主化後のメキシコの「民主主義の質」を低いものとしてきた(Mainwaring & Pérez-Liñán 2015)。

麻薬紛争という複雑な事象を理解するためには、それに付随するさまざまな現象に関する分析を統合することが不可欠だが、とりわけ重要なテーマのひとつが、麻薬紛争の様相を近年さらに複雑化させている「自警団」の勃興についてである。自警団とは、一方でカルテルによる殺害、誘拐、恐喝、強姦などの暴力に直面し、他方で腐敗によってカルテルとのつながりが疑われる地方当局に頼ることができない市民が、自ら武器をとってカルテルの一掃と治安の回復を目指した武装運動組織である。自警団運動の考察は、カルテル、政府、そして一般市民の複層的な関係性を解明するうえできわめて重要であるといえる。

この自警団運動は、どのような条件下で発生するのだろうか。比較的新しい現象ゆえに、メキシコの自警団運動については、メキシコ国外では日本を含めてまだ研究がほとんど存在しない。メキシコ国内ではこれまでエスノグラフィー的な論考や報告書は発表されてきたが、管見では、自警団の発生についての従来の議論は、運動の契機となる「不満」の指摘にとどまっている印象である(e.g. Guerra 2015)。しかし、不満を引き起こすような治安の劇的な悪化がみられるにもかかわらず、自警団運動が発生していない州も存在することに鑑みれば、従来の議論だけでは不十分であり、比較の観点からより体系的な説明が必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

上述の背景をふまえて、本研究では運動の発生を説明するさまざまな理論を参照しつつ、治安の悪化の中で大規模な自警団運動が生じたミチョアカン州の事例分析を通して、新たな理論構築を目指した。

ここで自警団運動の「発生」とは、運動の出現(emergence)と実際の活動(operation)を意味し、具体的には、運動が最低限の組織を有し、ある程度の持続性をもって集合行為を行うことを指す。本研究では、不満や脅威の存在を与件として、集合行為を可能にする組織と資源を重視する議論(e.g. McCarthy & Zald 1977)を下敷きに、ミチョアカン州の事例について詳細な検討を行うことで、新たな理論の構築を目指した。

## 3. 研究の方法

現地でのデータ収集を効率的・効果的に行うために、初年度に3週間の現地調査を計画し、メキシコ国内の研究者との協力体制を強化した。ミチョアカンの事例分析のために主に用いたのは、各州政府が有する治安や産業構造に関する統計資料、連邦人権委員会の報告書、全国紙および地方の主要紙、自警団運動に関するルポルタージュ、関係者へのインタビューなどである。麻薬紛争というテーマ上、インタビューには細心の注意を払う必要があるため、現地の研究者との連携の下に計画した。

## 4. 研究成果

本研究では、人々の暮らしに大きな負の影響を与えているメキシコの麻薬紛争に着目し、暴力が人々の日々の生活を脅かすなかで、非常にハイリスクな集合行為である自警団運動が発生、拡大する条件についての分析を進めた。メキシコでは2006年末以降、麻薬密輸組織に対する徹底した強硬策が実施され、犯罪組織の大物幹部の逮捕など一定の成果をあげたが、幹部を失った組織内での後継者争い、組織の分裂、外部から侵入してきた別の組織との縄張り争いの激化、中小のギャング集団の乱立、そして犯罪の多様化を招き、市民の被害を拡大させる結果ともなった。殺人事件の被害者は全国で年間2万人を超え、誘拐や恐喝、その他の犯罪を含めると、多くの市民が日常的に治安の問題を懸念しながら生活している。他方、暴力の状況や傾向、犯罪組織に対抗する自警団の組織化状況などについて見ると、地域差が大きいことも確認した。

以上についての最終成果は、馬場「麻薬紛争下の市民の蜂起:ミチョアカン自警団運動の事例」星野妙子編『メキシコの21世紀』アジア経済研究所(2019)として公刊した。この論稿では、麻薬紛争の下、とりわけ貧困状況の厳しい辺境地域において、市民に対する暴力被害が急激に高まり、腐敗した地方当局に代わって市民の保護を担う公的機関も存在しないなかで、自警団運動が市民にとって現実的な選択肢となっていた過程を論じた。とくにミチョアカン自警団の場合、当初からある程度組織構造が存在していたことや地元コミュニティの連帯、高い戦闘能力、そしてフレーミングの効果によって、大規模な運動に発展していったことを明らかにした。

<主要参考文献>

- Guerra Manzo, Enrique. 2015. "Las autodefensas de Michoacán: Movimiento social, paramilitarismo y neocaciquismo." *Política y Cultura* 44: 7-31.
- Lessing, Benjamin. 2015. "Logic of Violence in Criminal War." *Journal of Conflict Resolution* 59(8): 1486-1516.
- Mainwaring, Scott & Aníbal Pérez-Liñán. 2015. "Cross-Currents in Latin America." *Journal of Democracy* 26 (1): 114-127.
- McCarthy, John D. & Mayer Zald. 1977. "Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory." *American Journal of Sociology* 82(6): 1212-1241.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 馬場香織	4. 巻 34
2. 論文標題 ヘゲモニーの衰退と拡散する暴力 -- メキシコ麻薬紛争の新局面	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ラテンアメリカレポート	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 川中豪、重富真一、湊一樹、間寧、牧野久美子、大串敦、馬場香織、菊池啓一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 270
3. 書名 後退する民主主義、強化される権威主義	

1. 著者名 星野妙子、高橋百合子、和田毅、馬場香織、受田宏之、坂口安紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 アジア経済研究所	5. 総ページ数 254
3. 書名 メキシコの21世紀	

1. 著者名 馬場香織	4. 発行年 2018年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 225
3. 書名 ラテンアメリカの年金政治 -- 制度変容の多国間比較研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----